

ジョージ・A・バーミンガムの小説『宥和策』

—報われた「善意」と、「宥和策」が意味するもの—

八 幡 雅 彦

George A. Birmingham's Novel, *Appeasement* : "Good Intentions"
Rewarded at Last, and What "Appeasement" Implies

Masahiko YAHATA

【要 旨】

ジョージ・A・バーミンガムの『宥和策』(1939)は、第2次世界大戦の危機が迫り来る1938年、イギリス南西部の架空の田舎町チャンプフラワー・キャノニコラムを舞台にしたユーモア小説である。原始的で非衛生な村の環境改善を提案するフィリップ・チャロナーと、一切の改善を望まない村人たちの間で対立が起こる。フィリップも村人たちも基本的には「善意」を持っている。村の平和維持を切望するボンソンビー司祭は数々の宥和策を試みる。それは数多くの苦難を経て実を結び、フィリップと村人たちは和解に達し、彼らの善意は報われる。この小説には、善意に対するバーミンガム自身の信奉と、人間同士の宥和のためにはユーモアの精神が不可欠という彼の信念が見られる。同時にこの小説は、ネヴィル・チェインバレンのドイツに対する弱腰な宥和策を批判していると考えられる。『宥和策』は、人間同士の対立の解消と和解に対するバーミンガムの真摯な願望をユーモアという形で表現した、意義のある普遍的価値を持った小説である。

【キーワード】

アイルランド小説 ユーモア 戦争 善意 宥和策

1. 序論

小説家ジョージ・A・バーミンガムはジェイムズ・オウエン・ハネイ(1865-1950)の筆名である¹⁾。北アイルランドの首都ベルファストのプロテスタント・ユニオニストの家庭に生まれ、彼も父親同様、プロテスタント系のアイルランド国教会司祭になり、後にはイギリス国教会司祭となり、約60年間を聖職者として過ごし

た。しかしバーミンガムは、イギリスに忠誠を誓うプロテスタント・ユニオニストの家庭出身にもかかわらずアイルランドのナショナリズムに共鳴し、ダグラス・ハイドに乞われてゲリックリーグに加入し統一アイルランドを主張した。初期の小説『煮えたぎる釜』(1905)、『ハイヤシンス』(1906)、『ベネディクト・カヴァナー』(1907)、『北の鉄人』(1907)等でバーミンガムは、プロテスタントでありながらナショ

ナリズムに共鳴し、アイルランド独立を目指して戦い、敗れ挫折する青年たちを描いた²⁾。これらの青年たちは、ナショナリズムに共鳴していたとはいえ、プロテスタントということもあって時として「ナショナリズムが正しいのか、ユニオニズムが正しいのか」と苦悩する。彼らに共通して言えることは、彼らは「善意」に満ちており、アイルランドをより良き平和な国にするため全身全霊を傾けるということである。

1908年、バーミンガムは『スペインの黄金』を出版したが、これはそれまでの深刻な政治小説とは打って変わって軽快なトーンのユーモア小説で、ベストセラーとなり一躍バーミンガムは小説家として有名になった³⁾。若きアイルランド国教会副司祭 J.J. メルドンがイギリス退役軍人ケントとアイルランド西部の離れ小島に黄金探しの冒険に出かける。そこで彼らは島民から黄金を強奪しようとする悪漢を、地元のカトリック神父と協力して退治する。

この後もバーミンガムは、『ジョン・リーガン将軍』(1913)、『ウィッティー医師の冒険』(1913)を始め⁴⁾、善意に満ちた主人公たちが人々の対立を解決し和解のために獅子奮迅するユーモア小説を発表し続け、彼が生涯に発表した小説は約60冊に及んだ。しかし一般的には、彼が1892年から1913年まで滞在したアイルランド・メイヨー州のウェストポート時代に発表した作品が優れておりそれ以降の作品は軽くて意味が薄いとみなされがちである。しかし『宥和策』(1939)を始め『国境を越えて』(1942)、『善意』(1945)、『海の戦い』(1948)等の後期のユーモア小説は、全ての人間同士の和解に対するバーミンガムのさらに真摯な願いと善意が溢れた作品である⁵⁾。本稿では『宥和策』を取り上げ、登場人物たちの善意の行動がいかに対立を乗り越えて和解に達するかを分析し、この小説の原題である *Appeasement* が意味するものは何かを解明する。そのことによってこの小説の意義と普遍的価値について考察する。

2. フィリップの善意に対する村人たちの反感

『宥和策』の舞台はチャンプフラワー・キャノニコラムという架空の村で、バーミンガムが1924年から10年間住んだイギリス南西部のサマーセット州メルズがモデルである⁶⁾。人口600人余りのこの村の住民は、原始的で非衛生的な小屋のような住居で暮らしていた。しかし、「イングランド全体を見渡してもチャンプフラワー・キャノニコラムほど平和な村はないし、今までにもなかった⁷⁾」というこの小説の出だしの文章が示すように、村人たちは何の不満もなく平和に暮らしていた。

1925年に村の領主であるチャロナー卿が亡くなると妻のレディー・チャロナーが領主として跡を継ぎ、彼女は村にいかなる変化も寄せ付けず、村人たちもそれで満足していた。チャロナー夫妻のモデルはメルズの領主であったジョン・フランシス・ホーナー卿(1842-1927)とその妻フランシーズ・ジェイン・ホーナー(1854-1940)だと考えられる。ホーナー夫妻が住んでいたメルズの領主館の歴史は16世紀まで遡り、夫婦と親交のあったバーミンガムはここをしばしば訪れていた。メルズの村とこの領主館は、バーミンガムの別の小説『エリザベスと大執事』(1932)においてもブレイルトンという村のブレイルトン・グレインジという邸宅として登場してくる⁸⁾。



メルズの領主館 (Manor House)
—2004年7月著者撮影

チャンプフラワー・キャノニコラムの教区司

祭で、村の平和を望むアンソニー・ポンソンビー氏もわざわざレディー・チャロナーに背いてまで村を改良し波風を立てようという意味は持っていなかった。そのことは、「全世界のどの国の首相や指導者以上にアンソニー・ポンソンビーは平和を確保し維持しようと熱心に努めていた」という一文のうちに示されている。ポンソンビー司祭はバーミンガムの分身であるが、異なる点は、バーミンガムは、メルズ滞在中、すでに結婚して4人の子供がいたのに対し、ポンソンビー司祭はまだ独身だった。

しかしまもなくしてチャンプフラワー・キャノニコラムの平和に終止符が打たれ、ポンソンビー司祭を「トラブルの海」へと突き落す出来事が起きた。レディー・チャロナーが亡くなり、甥に当たるフィリップ・チャロナーが領主として跡を継ぐために村に戻ってきた。彼は、年齢的には中年の域に達していたが、未だに独身で、「溢れるばかりの善意」を持って村に戻ってきた。婦人参政権の熱心な提唱者であった母親から改革の精神を受け継いだ彼は村人たちの原始的で不衛生な住居の改築計画に乗り出した。村の数多くの住居は人間が住むには不適切と判断した彼は、ロンドンから建築家を呼び、新型の衛生的で芸術的な住居の設計を依頼した。しかし村人たちはビール、たばこ、サッカーくじなどの娯楽を犠牲にしてまで高い家賃を支払うことを嫌がり、改築に断固反対した。

ポンソンビー司祭はフィリップと村人たちの宥和策に乗り出した。州議会議員選挙が行われることになり、司祭はフィリップに立候補を勧めた。それはフィリップの関心を村の出来事からそらし、州全体に関わる改革に彼の気持ちを仕向けるためであった。当選したフィリップは、12の委員会に所属し州議会議員として活動を始めた。しかし運が悪いことにフィリップの関心を最も引いたのが12番目の教育改革委員会だった。そこでは田舎町に住む子供たちにより良い教育を受けさせるために町の学校にバスで通わせるという提案がなされ、フィリップはこれをチャンプフラワー・キャノニコムにも導入しようとした。村の学校には20人の子どもたち

が通っており、エリスという名の中年の女性がひとりで彼らを教えていたが、それを閉校し10キロ以上離れたチルバリーという町の学校に子供たちをバスで通わせるという決議が委員会の中でなされた。チルバリーのモデルになったのはフルームという町で、今日では人口が約2万4千人の町である⁹⁾。

村人たちは、以前フィリップが打ち出した住宅改築計画以上に、これに猛然と反対した。村のパブで連日連夜村人たちは激論を繰り広げた。ジェイムズ・ノークスという村人は、彼の子どものひとりが学校でエリスに鞭で打たれたことに腹を立て、彼女と何か月間も喧嘩をしていたが、「チルバリーでどこの馬の骨かもわからない奴に鞭で打たれるくらいなら、この村の学校でやられる方がましだ」¹⁰⁾と怒りをあらわにし、「ロンドンの連中がこの村の出来事に干渉するのを許すくらいなら、自分の3人の息子と2人の娘がナチスドイツの手で徹底的に鞭打たれた方がましだ」¹¹⁾とまで言い切った。かくして村人たちはボイコットを決意した。バスがやって来ても子どもたちを乗せず、子どもたちは思わぬ休日の到来に狂喜し、悪戯の限りを尽くすようになった。ボール遊びで村の家々のガラスを割り、悪ふざけで女兒を池に突き落とし、夜遅くまで歌を合唱しながら村を練り歩いた。

お手上げ状態になったポンソンビー司祭は、フィリップに「村を出て行った方が良いかもしれない」とまで忠告した。しかし思わぬ出来事からこの騒動に終止符が打たれることになった。

3. ドイツのロンドン空襲の脅威がもたらした村人たちの善意

1938年秋、ナチスドイツは領土拡大のためチェコスロバキアの侵略を目論んだ。イギリスはそれを阻止しようとしたため、ロンドンにはドイツによる空襲の脅威にさらされた。このニュースは遅ればせながらチャンプフラワー・キャノニコラムにも伝わり、村人たちはイギリ

スを守るために何かをせねばと決意した。まず学校に行かない子供たちの乱暴狼藉を阻止するために、ボイコットを止めバスで子供たちをチルバリーの学校に通わせ始めた。

フィリップはイギリス陸軍が村を通しやすくするために村の道路を拡張することを提案した。そのために500年以上前に作られ、現在は教会が所有している村の集会場を取り壊すことを求めた。しかし村人たちは、毎年恒例の花の展示会の時のダンスや婦人協会のお茶会ができなくなると猛然と反対した。

ポンソンビー司祭は再びフィリップと村人たちの宥和に乗り出し、村人たちには自分も取り壊しに反対だと告げ、一方フィリップには取り壊しには賛成だが、そのためには教会幹部の許可が必要でそれには多大な時間を要することを告げた。これでフィリップは道路拡張計画を諦めたが、彼の関心は、村を混乱させるまた別のことへと向いていった。

ドイツ軍の空襲の危機が迫るにつれて、「静かに落ちていて防空壕を掘ろう」というスローガンがイギリス全土に行き渡った。フィリップはチャンプフラワー・キャニコラムでも防空壕を掘ることを提案し、村の集会場でポンソンビー司祭を議長にして話し合いが持たれた。

フィリップが村の緑地公園を候補地として挙げたところ、「サッカーとクリケットができなくなる」「横切って酒場に行けなくなる」という理由で却下された。次いでノークスという男性が、ポンソンビー司祭が住んでいる司祭館の広場はどうかと提案した。司祭は平和のためには提供する心の準備はあったが、彼はそこをトリンブレットという農夫に貸しており、この農夫が、自分が飼っている牛が穴に落ちて骨折すると異議を唱えた。

そしてトリンブレットは「空襲で爆撃されて死んだらそのまま墓になるから」という理由で教会の中庭を提案したが、今度はペンベリーという未亡人が、教会の中庭にある先祖代々の墓を掘り起こされることに断固反対した。ポンソンビー司祭が礼拝を行っているこの教会のモデルになったのはセント・アンドリュース教会

で、通称メルズ教会と呼ばれており、今日では壁の一角にバーミンガムを記念する胸像が掲げられている。



セント・アンドリュース教会
(St. Andrew's Church)
—2004年7月著者撮影

混乱して結論が出ぬまま話し合いは終了し、宥和策が実を結ばなかったポンソンビー司祭は翌朝疲れていた。そんな時、彼のいとこで、ロンドンのセント・ソフィア女学校で校長を務めるモリー・バリントンから教師たちと生徒たちを疎開させてほしいと依頼する電話がかかってきた。ポンソンビー司祭もモリーとともにアイルランドの出身で、幼少時には一緒に遊び、ともにダブリン大学トリニティー校で学んだ。彼女は当時45歳で独身、彼女の学校には13歳から17歳まで約50人の生徒たちが通っていた。

おおらかなアイルランド人気質を備えたモリーは、ヒトラーはもっと力をつけて裕福になるまではイギリスを攻撃することはないだろうと楽観視し、もし攻撃されたとしても、「世界中には女子生徒と女性教員が多すぎる。だからそのうち何人かが殺されたとしたら、国の利益になるし、愛国的市民として自己犠牲の機会を

歓迎すべきだ』²⁾とさえ言い切った。しかし生徒たちの母親とイギリス政府当局からの度重なる圧力で彼女は教師たちと生徒たちを疎開させることを決意し、ポンソンビー司祭に40人の生徒たちと5人の教師たちの受け入れを要請した。

愛国心に満ちた村人たちは一致団結して彼女たちを迎えた。そして彼女たちは、ポンソンビー司祭の住む司祭館、フィリップの住む領主館他、村人たちの家に分散して住むことになった。



旧メルズ司祭館 (Old Rectory)
—2004年7月著者撮影

活気に満ち溢れた女子生徒たちは、領主館ではベッドではなくハンモックに寝たがり、フェンシングを習いたがった。これらの少女たちの世話で、村人たちは防空壕を巡る言い争いのことは忘れ、フィリップもまた村の様々な改善計画を提案することがなくなり、村には平和が訪れた。したがってポンソンビー司祭はドイツによるロンドン空爆の危機が後1、2週間続くことを望んだ。

4. チェインバレンの宥和策と村の平和崩壊の危機

しかしイギリス首相ネヴィル・チェインバレンはドイツによるイギリス空爆を防ぐために1938年9月30日、ヒトラーとミュンヘンで会談し、ドイツのチェコスロヴァキア侵略を容認した。チェインバレンが硬い表情でにこやかなヒ

トラーと握手を交わしている写真が現存している。

空爆の危機が去ったロンドンには喜びに包まれた。しかしチャンプフラワー・キャニコラムの村人たちはさほどの喜びは感じなかった。モリーもまた、ロンドンにはない新鮮な喜びを与えてくれたこの村を離れ女子生徒たちを連れてロンドンに帰らねばならないことに落胆した。ポンソンビー司祭も残念がった。彼は再びフィリップが村の改良計画を次々と打ち出し村の平和がかき乱されることを恐れた。そして「この心地よい状態がもっと続いてくれていたら良かったのに！実際に戦争になっていれば良かったのに！」³⁾とさえ感じるのだった。

しかし思わぬ事態が生じ、女子生徒たちはロンドンに帰れなくなった。5人の生徒がおたふく風邪にかかり次々に他の生徒たち伝染してゆき、医者から隔離を命ぜられたのである。モリーはこの隔離が解かれるまでは女子生徒たちをロンドンに連れて帰れないと判断し、ポンソンビー司祭は廃校となった村の学校を隔離病院にすることを提案した。それにすぐに賛同したフィリップは領主館の執事であるガンにチルバリーに病室用のベッドを買いに行かせた。農夫のトリンプレットもベッドを運ぶために貨物自動車数を数台提供した。村の学校の元校長だったエリスは看護師として子供たちの面倒を見ることを申し出た。彼女に引き続いて村の女性たちも続々とアマチュア看護師になった。フィリップと村人たちの善意に溢れる行動はさらに続いた。フィリップは残りの生徒たちがおたふく風邪にかかることを防ぐために、新鮮な空気、緑の野原、太陽の中での自然観察に連れ出すことを企画した。そして村の子供たちも案内役として加わった。しかしおたふく風邪の患者は日増しに増え、かかっているのは以前にかかってもう治ったモリーの学校の女子生徒3人と村の子供2人だけになった。自分の善意がまったく報われないことにフィリップは落胆した。

フィリップはおたふく風邪の伝染の原因は村に下水設備が整っていないせいだと指摘した。そして善意に満ちた彼は、その責任は村の領主

である自分に帰せられると自分を責めた。チャンプフラワー・キャノニコラムは、村の誕生以来、600年間下水設備がなかった。フィリップは村のクリケットクラブに寄付をし、花の展覧会に賞品を提供するなどしており、村人たちは彼の善意を十分に認めていた。しかし村人たちは、下水設備を新設した場合、家賃が上がるという理由で断固反対した。村人たちの中には、「モリー・バリントンの学校の女子生徒たちがやって来なければ、このような災難に村の生活が脅かされることはなかった。彼女たちが下水設備を望むのならば、それがあるところへ行けばいい¹⁴⁾」とまで言う者も現れ、村の平和は崩壊の危機に瀕した。

5. ポンソンビー司祭の宥和策と、報われたフィリップの善意

フィリップの下水道設備計画を阻止するためにスタイルズ、マッジ、ノークスという3人の村の有力者が代表団を結成し、ポンソンビー司祭のもとに陳情に訪れた。司祭は再び村人たちとフィリップの間の宥和策に乗り出した。司祭は代表団の3人を真正面から攻撃しても勝ち目はないということは分かっていた。また厄介な計画を処理するには公然と反対する以外にも方法はあることを彼は知っていた。この小説過去形で進行するが、この部分は“*But there are other ways of dealing with a troublesome scheme besides open opposition.*”¹⁵⁾と現在形が使われており、これはパーミング自身の見解を述べたものと言えよう。

司祭はチルバリーに出かけ、ウィリス医師に会い、おたふく風邪は不十分な下水設備のせいではないという医師の見解を得た。司祭はこのことをフィリップに報告したが、もし村に下水設備があれば村の衛生状態はなお良くなるだろうという医師の言葉は伝えなかった。宥和策に必要な心得をパーミングは次のように述べる。

外交官に期待される一番のことは — 今回の

任務において司祭は非常に優れた外交官であったと言える — 真実を語るということであるが、それさえも要求されないことが往々にしてある。誰も外交官にすべての真実を語ることは要求しない。もし彼がそうしたとしたら彼は三流の外交官であろう¹⁶⁾。

これはパーミング自身の人生体験から導き出された説得力に満ちた一節である。深い信心を持ち、正義感と善意に満ちたパーミングは、初期の小説においては真正面からアイルランド問題の真実を読者に突き付けた。しかし、アイルランド問題の解決を真に願う善意に満ちたこれらの作品はカトリックとプロテスタント双方に対する批判を含んでいたがゆえに誤解を招いた。これが、パーミングが後にユーモア小説に転向するきっかけとなり、これらの作品の中では、ポンソンビー司祭のようにユーモアの精神に富んだ主人公たちが、対立する人間たちに鷹揚な態度で接し、奇想天外な発想で双方の宥和を成し遂げる。

ポンソンビー司祭の、村人たちとフィリップの宥和に向けての努力は続く。おたふく風邪の原因は何かと食い下がるフィリップに対して、ポンソンビー司祭は再びウィリス医師のもとを訪れ、「現在、科学が解明しうる限りでは、地震や津波のように原因不明で起きるものであり、下水は数多くの病気の原因ではあるが、おたふく風邪の原因ではない¹⁷⁾」という医師の見解を得て、フィリップに伝えた。

さらにポンソンビー司祭は、村の過去15年間の埋葬記録をつぶさに調べて死亡平均年齢を算出したところ78.4歳とイギリスでも有数の平均寿命の高さを誇っていることが判明し、それをフィリップに提示した。しかしフィリップは下水道設備が整っておれば村人たちはもっと豊かで健康になれるだろうと主張し、2人の議論は平行線を辿ったままで、ポンソンビー司祭は落胆して帰宅した。

一方、フィリップも新たなトラブルに遭遇した。彼の領主館には3人の女性教師と3人の女子生徒が身を寄せていたが、気の弱いエイムズ

という教師が、毎朝、「おたふく風邪にかかった」と言い、ウィリス医師が「かかっていない」と断言しても、彼女はフィリップにすがり泣き喚いた。カーティスという体育教師は、エイムズと、家庭科教師エヴァンデイルと、3人の女子生徒に毎朝1時間の運動を命じた。嫌がる女子生徒たちはフィリップに不満を訴えたが、カーティスと口を聞くのが恐ろしいフィリップは、女子生徒たちにチョコレートを与えてなだめ、運動を続けさせた。エヴァンデイルはフィリップに電気かガスのストーブを買ってくれないともう料理は作らないと告げた。ストーブがなくても、毎晩司祭館で食事をしているフィリップと、おたふく風邪にかかってミルクだけ飲んで他の女子生徒たちには何の支障もなかったが、食欲旺盛なカーティスと、エイムズと、おたふく風邪にかかっていない3人の女子生徒たちからは不満が噴出した。とうとうフィリップは耐えきれなくなって神経衰弱に陥った。

しかし校長のモリー・バリントンはポンソンビー司祭に「フィリップは下水設備のことを話す時でもとてもすてきな人よ。彼は善良な心の持ち主よ」¹⁸⁾と語り、彼の村を良くしようという善意を称賛していた。そこで司祭は村の平和のためにフィリップとモリーを結婚させるという妙案を思いついた。司祭は次のようにモリーに語った。

「私が願っているのは、フィリップ卿が村の面倒を見すぎるとを君に防いでもらいたいということだ。モリー、君なら彼の心をとりにできる。蘭の花のことで、クロッケーのゲームでも、希少本のことで君の好きなことなら何でもいいから。彼を忙しくさせて、理性にかなったことに彼の興味を仕向けてもらいたい。例えば豚の賞レースとか。豚はすばらしい動物だ。展示会のレースで戦わせたら本当にスリルがある。しかし、彼の心を全ての忌々しい村の改良計画からそらすことができるのだったら何だってかまわない」¹⁹⁾

今までポンソンビー司祭は村人たちとフィリップ両方の意見を聞き入れ宥和策を試みてきたが、それはうまくいかなかった。そこで司祭は、モリーとの幸せな結婚によってフィリップの関心を家庭生活に向けさせ、彼の心を村の改良計画からそらせるという奇抜な宥和策を思いついたのである。このような意表を突く策略あるいは宥和策は、『スペインの黄金』(1908)、『ジョン・リーガン将軍』(1913)、『ウィッティー医師の冒険』(1913)他のバーミンガムの数多くのユーモア小説のうちにおいても見られる。それらは、全ての人々の融和・和解に対するバーミンガムの真摯な願望を、説得力を込めて表現しているといえよう。

そしてフィリップとモリーの結婚実現に一役買ったのが領主館の執事のガンだった。彼はポンソンビー司祭に「今、フィリップ卿に必要なのは思慮分別のある妻をもらうことです。もの静かで思慮分別のある妻をもらうことです」²⁰⁾と忠告し、ふたりの仲人役を務めた。村人たちは誰もがふたりの結婚を祝福し、ハッピーエンドでこの小説は終わる。結局はポンソンビー司祭の宥和策は実を結び、フィリップの善意も報われた。

6. バーミンガムの「善意」に対する信奉

『宥和策』はバーミンガムの「善意」に対する信奉を現した小説といえよう。バーミンガムの善意に対する信奉はどのようにして生まれたのか。

バーミンガムが生きた19世紀後半から20世紀の前半はアイルランドの歴史においては最も激動の時期であった。アイルランドはイギリスの植民地支配下にあり、バーミンガムはアイルランドとイギリス、カトリックとプロテスタント、ナショナリストとカトリックの対立・紛争を目の当たりにしてきた。

信仰心の深いキリスト教徒であったバーミンガムは、約60年間、聖職者として神に仕えた。それゆえに正義感と善意に満ちた彼は、アイルランドの平和を心から願い、『煮えたぎる釜』

(1905)、『ハイヤシンス』(1906)、『ベネディクト・カヴァナー』(1907)、『北の鉄人』(1907)等の小説の中で、真正面から真剣にアイルランド問題に取り組む善意ある主人公たちを描いた。そして彼らの多くの挫折を描くことにより、バーミンガムはアイルランド問題の深刻さを訴えた。しかしそれらの作品はカトリック、プロテスタント双方を批判したがために、バーミンガムの善意は双方から誤解を受けた。

この体験からバーミンガムが悟ったのは、人間同士の和解のためには、物事は何事も真面目に考えるべきではなくユーモアの精神を持って取り組むことが必要だということだった。このバーミンガムの信念は、彼の自叙伝『麗しき土地』(1934)の中、「役所の仕事は決して真面目にやるべきではない。それは常にコミカルなもので、ジョークとして取り扱うべきだ²¹⁾」という一節のうちに端的に示されている。

かくしてバーミンガムは1908年、それまでの深刻な政治小説とは違って変わってユーモアに満ちた『スペインの黄金』を発表した。善意と活力に溢れたアイルランド国教会副司祭 J.J. メルドンが、朋友でイギリス退役軍人ケントとともに、アイルランド西部の離れ小島に黄金探しの冒険に出かけるが、その黄金は島の住民のひとりが隠し持っていることを発見する。かくして2人は諦めるが、この島に黄金探しにやって来た別の2人の悪漢がそれを強奪する。メルドンは島のカトリック神父マルクルーンと力を合わせ、黄金を奪い返し、島民たちの間でその黄金は等分されることになり、ハッピーエンドを迎える。メルドンとマルクルーンは2人の悪漢を2度と島に近づけないようにしただけで、司法の手には渡すことなく見逃した。ユーモアと善意に溢れたこの小説はベストセラーとなり、バーミンガムは一躍小説家として有名になった。

その後もバーミンガムは、『ジョン・リーガン将軍』(1913)、『ウィッティー医師の冒険』(1913)のように、善意と活力に溢れた主人公たちが、奇抜な策略を用いて人々の宥和をもたらす小説を発表し続けた。しかし彼のユーモア

小説も時として誤解を招くことがあった。

『ジョン・リーガン将軍』は、アイルランド西部の架空の田舎町バリモイの住民たちが、この町を訪れたアメリカ人富豪を騙して町に大金を寄付させようとする物語であった。バリモイのモデルになったのはバーミンガムが当時住んでいたウェストポートであった。新聞記者でビリングと名乗るこのアメリカ人は、この町に生まれ南米ボリビアの独立のために戦ったジョン・リーガン将軍の銅像を見学し、そして将軍の伝記を書くための調査を行いたいと語った。しかしこの町の誰一人として将軍のことは知らなかった。そこで主人公のオグラディー医師が、町民たちを一致団結させ、将軍にまつわる偽の話をでっち上げ、偽の銅像を作り上げた。最後に彼らの策略がばれ、すべてが水泡に帰すかと思われた時、このアメリカ人が謎の将軍に関する真実を明かした。町民をまとめ上げ彼を騙そうとしたオグラディー医師のエネルギーに感心したこのアメリカ人は町に大金を寄付し、ハッピーエンドで終わる。

この小説の演劇版がロンドンとニューヨークで上演された時大ヒットしたが、1914年の2月にこの小説の舞台であるウェストポートで上演された時、地元の人々は「アイルランド人を卑しく、下品で愚かに描いている」と激怒し、アイルランド演劇史上最悪の暴動を起こし、20人以上が逮捕される騒動となった。しかしこの作品の中でバーミンガムがもっとも強調したかったのは、町のナショナリスト住民とユニオニスト住民の宥和を目指したオグラディー医師の善意であった。

このような誤解を受けることがあったにもかかわらず、信仰心の深いキリスト教徒として人間愛と寛容の心を持ったバーミンガムは善意に対する信奉を失うことなく、『宥和策』や『国境を越えて』(1942)、『善意』(1945)といった作品に昇華させていった。『善意』では、第2次世界大戦中にロンドンからアメリカへ疎開する少女が、「これを拾った方にはプレゼントを贈りたい」という善意のメッセージを入れた器を船の上から海へと投げる。これを拾ったのが、

父親がIRAに属する少女だったことから深刻なトラブルへと発展して行った。最後にはこの少女がプレゼントを手にしハッピーエンドに終わったが、トラブルの解決に東奔西走した主人公のバン・レナン氏は「世界中の本当のトラブルの大半は善意から始まるのだ」²²⁾と語った。これはバーミンガム自身の声といえよう。

7. 結論 - 「宥和策」が意味するもの -

前述したように、『宥和策』における宥和策が指し示すものは、ひとつはフィリップとチャンプフラワー・キャニコラムの村人たちの対立を解決して村の平和を取り戻そうとするポンソンビー司祭の宥和に向けた努力であり、もうひとつはドイツのイギリス空爆を防ぐためにヒトラーにチェコスロヴァキア侵略を認めたチェインバレン首相の宥和策である。

バーミンガムはこの小説を通してチェインバレンの弱腰な宥和策を批判しようとしたのではないだろうか。ドイツのロンドン空爆の危機が迫ったがゆえにモリー・バリントンの女子校の生徒たちが村に疎開してきて、村人たちは一致団結して彼女たちの受入に協力し、それまでのお互いの対立は解消した。しかしチェインバレンが宥和策を打ち出したことによってロンドンの空爆の危機は去り、モリーは女子生徒たちを連れてロンドンに帰ることを決意した。しかしポンソンビー司祭は、それによってまたフィリップが村の改良計画を再び持ち出し、村人たちとの対立が再燃することを恐れた。そして村人たちも、モリーも女子生徒たちも別れることを残念がった。バーミンガムはチェインバレンの宥和策を村の平和を乱すものとして描いており、イギリスはあくまで正義を通してドイツと戦いを続けるべきだと訴えているように思われる。

バーミンガムのこの正義感は、約60年間を聖職者として神に仕えた彼の深いキリスト教親交に根ざしているといえよう。そして彼の正義感は、初期の小説『煮えたぎる釜』、『ハイヤシンス』、『ベネディクト・カヴァナー』、『北の鉄

人』等に顕著に現れており、決して妥協を許さずアイルランドの真の平和のために戦う主人公たちが登場してくる。またその後の『スペインの黄金』から続くユーモア小説の中でも、主人公達は、人々の宥和のために妥協することなく獅子奮迅の活躍をする。

バーミンガムの妥協を許さぬ正義感は、彼自身の戦争体験においても見られる。バーミンガムは、イギリスが断固正しいという信念を持ち、第1次世界大戦中にイギリス陸軍の従軍司祭として志願し、1916年から翌1917年にかけて戦場に赴いた。そして彼は、「他の数多くの人間と同じように私は病人として戦争から帰ってきた。戦争には栄光もロマンも何ひとつ無かった」²³⁾と述べているように戦争の悲惨さを実体験したがゆえに、平和と人々の和解をさらに強く望む気持ちが溢れ出た小説を書くようになったのだろう。

バーミンガムは1924年から1934年までの10年間、『宥和策』の舞台となったメルズで教区司祭を務めた。この村を舞台に戦争を題材とした小説を書いたひとつの理由に、彼と親交のあったメルズの領主ホーナー夫妻の家族が経験した戦争の悲劇が考えられる。夫妻の息子であるエドワード・ホーナー(1888-1917)は第一次大戦で戦死した。そして娘キャサリン(1885-1976)の夫のレイモンド・アスキス(1878-1916)も同じ第一次大戦で戦死した。現在、メ



メルズの戦争記念碑 (War Memorial)
左段の下から2番目にエドワード・ホーナー (Edward Horner) の名前がある。

-2004年7月著者撮影

ルズにはこの村から第1次世界大戦に出兵し戦死した兵士たちの名が刻まれた『戦争記念碑』が建っており、エドワード・ホーナーの名前も刻まれている。

『宥和策』が出版された翌年の1940年、バーミンガムは『ろくろ』という神学書の中で、迫り来る第2次世界大戦の脅威について述べている。1939年8月後半、彼はブルターニュ海岸のある湾を見下ろす小さなテラスに座って、2人の女性と話していた。穏やかな天気の良い日で、彼らの眼下では遊覧船や漁船が行き交い、子供たちや明るい水着を着た人々が水遊びを楽しんでいた。しかしその反面でバーミンガムは2人の女性と戦争の危機について語り合っていた。

私たちは、深刻に、悲しく語り合った。というのは戦争という大惨事の影が我々の上にたれ込めており、避けて通れないものに思えたからである。私たちの心の中は皆同じ考えで占められていた。多くの人間が問いかけ、そしてほとんどの人間が満足のゆく答えを見いだせないこの避けて通れない問いかけで私たちの心の中は占められていた。なぜこの罪もない楽しい生活にすべて突然終止符が打たれなければならないのか。なぜ喜びは悲しみに、笑いは涙に変わらなければならないのか。なぜ悪いこと何ひとつしていない男性たちが苦しめられ殺されなければならないのか。なぜ女性たちの心が引き裂かれなければならないのか。我々が信じている通りに、もし神が存在するのなら、神が本当に全能ならば、神が本当に愛情に満ちているのなら、なぜ神は我々が善と見なすものの上に悪が君臨することを許すのか。私たちは恐ろしいジレンマに直面していた。神は弱くて無力なのか、それとも神は無関心で気に留めていないだけなのだろうか²⁴⁾。

『宥和策』は、このようなバーミンガムの平和を希求する真摯な願いが滲み出た小説である。そしてこの小説では、『国境を越えて』、『善意』、『海の戦い』同様、敵国ドイツに対す

る憎しみは微塵も感じられない。「なぜ悪いこと何ひとつしていない男性たちが苦しめられ殺されなければならないのか。なぜ女性たちの心が引き裂かれなければならないのか」というバーミンガムの思いは敵国ドイツの国民に対しても馳せられた思いであるようだ。

『宥和策』はユーモアという手法を用いて、戦争の終結と全ての人間の和解を希求した、意義深い、普遍的価値を持った小説である。



1927年、メルズに住んでいた頃のバーミンガム
—National Portrait Gallery, London 提供

注

- 1) 本名の英語名は James Owen Hannay。
- 2) 原題はそれぞれ *The Seething Pot* (1905)、*Hyacinth* (1906)、*Benedict Kavanagh* (1907)、*The Northern Iron* (1907)。
- 3) 原題は *Spanish Gold* (1908)。
- 4) 原題は *General John Regan* (1913)、*The Adventures of Dr. Whitty* (1913)。
- 5) 原題はそれぞれ *Appeasement* (1939)、*Over the Border* (1942)、*Good Intentions* (1945)、*A Sea Battle* (1948)。

- 6) 英語名は Mells, Somerset。2001年度の統計では人口647人。
- 7) George A. Birmingham, *Appeasement* (London: Methuen, 1939), p. 3.
- 8) この小説の原題は *Elizabeth and the Archdeacon* (1932) で、村は Brailton で、邸宅は Brailton Grange。
- 9) 英語名は Frome。2010年度の統計では、人口は 24,050人。
- 10) *Appeasement*, p. 30.
- 11) *Ibid.*
- 12) *Ibid.*, p. 104.
- 13) *Ibid.*, p. 196.
- 14) *Ibid.*, pp. 221–2.
- 15) *Ibid.*, p. 223.
- 16) *Ibid.*, p. 224.
- 17) *Ibid.*
- 18) *Ibid.*, p. 229.
- 19) *Ibid.*, p. 242.
- 20) *Ibid.*, p. 247.
- 21) George A. Birmingham, *Pleasant Places* (London: William Heinemann, 1934), p. 149.
- 22) George A. Birmingham, *Good Intentions* (London: Methuen, 1945), p. 21.
- 23) *Pleasant Places*, p. 239.
- 24) George A. Birmingham, *The Potter's Wheel* (London: Longmans, Green & Co.), pp. 9–10.

本稿は、科学研究費・基盤研究(C)：課題番号22520288「ジョージ・A・バーミンガムを中心に、北アイルランド小説の普遍的意義に関する研究」に基づく研究成果の一部である。

【Abstract】

George A. Birmingham, *Appeasement* (1939), is a humorous novel about what happens in a fictional English village, Champ-flower Canonicorum, during the upcoming crisis of World War II. Conflicts occur between Philip Challoner, who suggests various projects to improve the primitive conditions of the village, and the villagers who do not want any improvement. The parish rector, Rev. Anthony Ponsonby, attempts to appease Philip and the villagers. The rector's attempts bear fruit when they come to reconciliation and everyone's good intentions are rewarded at last. This novel shows Birmingham's own faith in good intentions and his belief that the spirit of humor is indispensable in appeasing conflicts. At the same time this novel is likely to criticize Neville Chamberlain's "Appeasement" policy. *Appeasement* represents Birmingham's hearty wish for reconciliation between every human being.

【Keywords】

Irish novel Humor War Good intentions
Appeasement